おんがく広場 ♪Music Square♪
第241号
令和5年(2023) 8月28日(月)
Facebook,Twitterにも掲載／リンクフリー／御自由にコピーして下さい　令和2年(2020)4月10日創刊
発行・クッキー会　発行責任者・加藤良一
連絡先　rkato@max.hi-ho.ne.jp

国技館5000人の第九

第37回 5年ぶりに復活！ 出演者募集中

クッキー会　加藤良一

復活の第九・未来への第九

国技館5000人の第九コンサートは、2020年2月に開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の発生で開催日の1週間前に中止となって以来、中止や延期を余儀なくされ途絶えていました。その後開催の可能性を模索し続け、ようやく「**2024年2月18日開催**」予定となりました。出演者募集は8月1日より10月20日まで受付けています。ただし、パートごとに定員に達した時点で締め切られます。

来年2024年は、「第九」の初演から200年、日本人が初演してから100年という記念すべき節目の年にあたります。主催者は「**復活の第九・未来への第九　初演から200年の時を超えて**」をテーマに掲げています。

国技館すみだ第九を歌う会

国技館すみだ第九を歌う会は、1984年4月、その翌年竣工予定の**両国国技館**の歓迎祝賀行事として、ベートーヴェンの交響曲第九番を5000人で歌うために発足し、1985年2月「第1回コンサート」を開催しました。

指揮　石丸寛
独唱　中沢桂、井原直子、五十嵐喜芳、栗林慶喜
管弦楽　東京交響楽団
合唱指揮　辻正行
合唱　国技館すみだ第九を歌う会合唱団

義母(はは)も歌ったすみだ第九

1995年4月の第11回コンサートには、筆者の義母(はは)(当時72歳)が山形から参加するというので、親戚一同家族ぐるみで国技館へ聴きに行きました。この時の指揮は大友直人、独唱が大倉由紀枝、井原直子、錦織健、勝部太、合唱指揮に古橋富士雄、栗山文昭、関屋晋というみごとな布陣でした。

国技館はそもそも相撲のためのものだから、土俵から放射状に客席が広がっていて、演奏者5000人vs聴衆5000人というわけです。オケはちょうど土俵のあたりの舞台に乗り、合唱団はそれを取り囲むようにマス席やイス席で半円状に並んでいます。5000人ともなると端から端まではかなりの距離があるため、後方の人は前方の人より少し前に発声するように指示されました。

すみだ第九の常連・宮崎の荒川(あらかわ) 滋(しげる)さん

筆者の友人荒川滋さん(フルトン男声合唱団・宮崎第九を歌う会)も「第九」に魅せられたお一人です。国技館すみだ第九を歌う会交流紙「パスカル」2023年8月号の特集に次のような一文を寄せています。

> 「すみだ第九」再開の報に、嬉しさいっぱいです。戦時中、まだ幼少の頃生地(せいち)の東京世田谷から宮崎へ疎開した私にとって、恒例の「すみだ第九」への参加は、皆さんとの再会に加えて、都内を散策する好機でもあります。千鳥ヶ淵戦没者墓苑、東京大空襲戦災資料センター、わだつみのこえ記念館など、上京の都度訪れてきました。83歳、余命幾ばく老いぼれの身は、「二度と戦争があってはならない」を心の糧として、残り少ない人生をひたすら歩いてまいります。

荒川さんが初めて「すみだ第九」に参加したのは、2004年の第20回でした。その後35回までの16年間続けて参加しています。開催前日の土曜日には、国技館内で国内交流「パスカル」の集まりが行われており、そこで全国の合唱人との交流を楽しみにしているといいます。

荒川さんは毎回、木曜から月曜に掛けて4泊5日の行程で参加しています。演奏会当日は、東京周辺に在住の知人が誘い合って、会場へ聴きにきてくれ、終演後の両国界隈での小宴がお決まりのコースとなっています。そこでは、郷土宮崎県や高岡町(旧穆佐(むかさ)村)の懐かしい話で時間の経つのも忘れるほど盛り上がります。荒川さんは、コロナ禍が早く収束し待望の第37回演奏会が開催されることを、心待ちにしています。

荒川さんと筆者は、2005年2月5日、男声合唱プロジェクトYARO会が大宮で開催した「多田武彦合唱講習会」にはるばる宮崎からお越しになった時からのお付き合いです。(写真左：荒川さん、右：筆者)

その後、2010年に宮崎で第1回全日本男声合唱フェスティバルが開かれたとき、筆者が個人的に参加するためフルトン男声合唱団の俄(にわ)かメンバーとして加えて頂きました。

荒川さんは、筆者のホームページにエッセイを書いておられます。
直近のエッセイ：「東海メールクワィアー定期演奏会を聴く」
http://rkato.sakura.ne.jp/music/m194_tokai_malechoir_concert.pdf